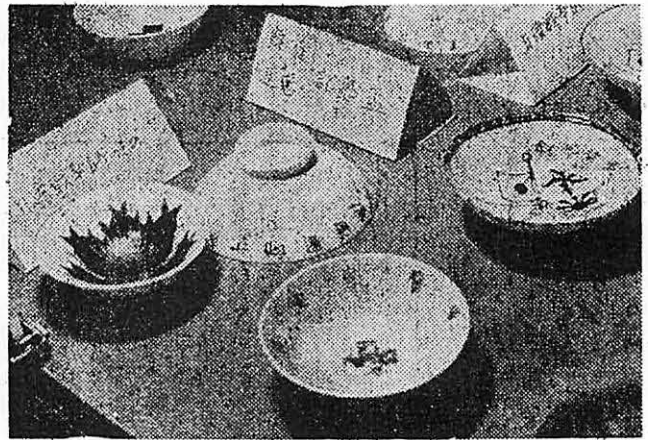




# 民俗資料持ち寄り 「街の博物館」造る

東灘・深江に「生活文化史料室」



日清、日露戦争時の凱旋（がいせん）や退營記念の杯

## 身近な歴史探訪の場

江戸時代以降 貴重な道具など千点

郷土に伝わっている古い生活用具やがん具などの民俗資料を後世に伝えようと、神戸市東灘区深江地区の住民たちが、元の神社の境内に立派な「生活文化史料室」を建設した。いわば「ミニ歴史博物館」で、有志からも寄せられた約千点にのぼる民俗資料の整理、陳列もはじまっており、あとは二月二十一日の開館を待つばかり。しかも関係者は「史料室の主権で講演会や見学会を開いていく」と夢をふくらませており、郷土の歴史探訪の拠点となる手作りの博物館として、大きな注目を集めている。



大正時代の物と思われる真ちゅう製の酒かん器

### 資料提供は

史料室建設のきっかけとなった深江で六代続く医師・深山健二家から收藏品の大半の寄贈を受けましたが、その他に、志井正夫氏、志井保治氏、永井彦右衛門氏、伊吹順隆氏、太田垣正雄氏、永井静江氏、深江消防団、深江漁協などから、貴重な資料の提供をうけました。

# 来月21日、喜びの開館

史料室ができたのは、同区深江本町三ノ五〇七の大日靈女(おおひるめ)神社の一角。この境内にはすでに深江財産区管理会「太田恒正雄会長」が建てた「深江会館」があり、史料室はその別館として建てられた。

建物は鉄筋コンクリート二階建て、延べ床面積は約八十三平方メートル。二階が展示等と事務所に充てられ、一階が展示し切れない収蔵品などを納める倉庫になっている。展示室は間口が三辺強、奥行きが約十辺の細長い部屋で、すでにガラス張りの陳列ケースには、江戸時代から明治、大正、昭和初期にかけての暮らしをしのばせる資料約三百点がびっしりと並んでいる。

建設のきっかけは、昨年四月、同財産区管理会が県立御影高校の田辺真人教諭(ごん)に、深江の歴史の編纂を依頼したこと。田辺教諭は同管理会に「参考になる資料をできるだけ集めてほ

しい」と返に依頼し、管理会が地域の住民に提供を呼びかけた。

これに対し、江戸末期から大正に結く医者一家の深山健二さん(ごん)が「同区深江本町三ノ六」から「明治八年に建てた自宅を解体するの

で、伝わっている古い生活用具をまとめて寄贈したい」と思いもかけぬ申し出があった。さっそく同教諭が調査したところ、貴重なものが続々と見つかり、宝の山であることがわかり、同管理会でも「せっかくの好意を無にはできない」と急ぎ史料室の建設を計画するなか、話はトントン拍子に進んだという。

このほか、深江消防団や管理会の役員らも貴重な品物を提供し、これまでに集まったのは約千点。深山さんから提供された明治時代の顕微鏡や注射器、天びんばかりなどの医療器具を初め、明治のひな人形や大正時代の子供用のレコード、張り子のトランプなどがん具、岐阜卓ようちん、針箱、男物

と女物に分かれた正月用のぜん、それに昭和初期に使った消防用の半鐘や、祭には欠かせなかっただんじりの豪華な引幕、古い県下の地図など、各時代の香りを漂わす興味深い物がそろっている。

二月二十一日の開館後は、毎週土、日曜日に無料公開するが、一度に全体の三分の一ほどしか展示できないため定期的に展示品を入れ替え、時にはテーマを絞った特別展なども開く計画。このほか、田辺教諭を中心に史料室のスタッフを編成し、史話の編集をはじめ講演会や見学会の主催など多彩な活動を盛り広げるといふ。

田辺真人県立御影高校教諭の話を郷土に寄せる住民の熱意には、本当に驚かされた。こういう形で「三博物館」が誕生するのは県下でも例がないだろう。地域の歴史と生活文化の歩みを見直すすばらしい拠点になるよう出来る限りの助力したい。



生活の香りに満ちた博物館に 田辺教諭(右から二人目)を中心に資料の整理をする深江財産区管理会の役員たち—神戸市東灘区深江本町の生活文化史料室で



室内の飾り付けをする田辺先生(右端)と教え子、管理会の人たち



# 消えゆく郷土史料残そう

## 教え子と目録作り

—神戸・深江の民俗博物館—

### 元 県立芦屋高の田辺教諭ら

【芦屋】県立芦屋高校に勤務中、芦屋市内の郷土史料を発掘した田辺真人教諭(三)〔現県立御影高〕が、神戸市東灘区深江本町三、深江・大日神社の境内に完成した深江財産区管理会(太田垣正雄会長)のわが町民俗博物館「神戸深江会館生活文化史料室」で、教え子二人とともに展示品の整理や飾り付けに追われている。同室は深江地区の人たちが、消えゆく史料を保存するために新築、各家庭に古くから伝わる生活用品を持ち寄って展示するもので、二月二十一日オープンする。

同室の建設は、太田垣会長が深江地区の村史づくりを思いついたのがきっかけ。「このままでは史料が埋もれてしまう」と考えた同会長は、管理会の役員会、東灘区役所の人たちと相談、昨年五月ごろ田辺先生を訪ねて村史の編集を依頼した。田辺先生は関学大史学科を卒業した四十六年春から県立芦屋高校で社会科を担当。文政年間(一八一八—一八三〇)に起きた芦屋打出両村(現芦屋市)と任吉、横屋、魚崎、田中、野寄、岡本、八木(神戸市)の水争いの原因にな

と申し出があったのをはじめ、区内の人たちから約千点が深江会館に寄せられたので、鉄筋コンクリート一階建て延べ約八十三平方メートルの史料室を新築、一階は倉庫、二階にガラスケースなどを備えた常設展示場と事務室を作った。

しかし、これだけの史料は田辺先生一人で調査しきれず、話を聞いた芦屋高時代の教え子、渡部永子さん(三)〔芦屋市山手町〕と深尾玲子さん(三〇)〔同市岩園町〕が今年初めから協力、土、日曜に分類、目録づくりを手伝っている。

展示品は、関ヶ原の戦いで使われたまろい、かぶと、日清、日露戦争の軍服、砲弾、消防団のはつぴ、半鐘、深江地車の引き幕から二百年前のサラ、ハチなどの陶器、慶応三年(一八六七)の大福帳、明治時代の木の水筒、顕微鏡、天びん計り、医学書、新聞、大正時代の蓄音機とレコード、人形、カルタなど。また、昔のコイのぼり、べつごうのかんざし、ウシの鞍、農漁具、大漁旗もあり、民、武器、食器、おもちゃ、衣類の百分野にわたって、文化遺産が多く含まれている。オープン後は土、日曜に開館、四季ごとに展示替えの予定。

# 天然痘と闘う姿まざまざ

## 神戸で江戸末期の貴重な資料

# 種痘の免状やカルテ

### 医師宅 深江の史料室に展示



深山家から見つかった江戸時代から明治へかけての医学資料—神戸市東灘区深江本町3ノ5ノ7、深江生活文化史料室で

イギリスのジェンナーが発見しているだけで奈良時代から明治まで約百回もの流行があった病気。発見された資料には大阪種痘館からの免状や個人ごとのカルテなど、江戸後期から明治初期へかけての医師の天然痘への真剣な取り組みをうかがわせる貴重なものが多い。

この種痘に関する資料は、二十

一日からオープンする神戸深江会館・生活文化史料室(田辺真人室長、神戸市東灘区深江本町三ノ五ノ七)の展示物収集の過程で見つかった。史料室の準備を進めている深江財産区管理会の委員である、同区深江本町三ノ九ノ一、志井正夫さん(志井)が近くの深山医院(深山健二院長)の改築計画

を聞いて「百十年もたった家には必ず貴重な資料がある」と判断。取り壊し前に同家を訪れ旧家の書庫などを調査したところ、貴重な資料が数多く眠っており、深山院長の善意で展示出品にこぎつけた。

見つかった主なものは、江戸時代の蘭学者で医学者の緒方洪庵らが設立した大阪除痘館が発展した種痘館からの種痘実施免許状や、種痘の効果接種、不接種別の人数で強調した「PRチラシ」など。また、文久年間(一八六一—一八六四)に行った種痘について、個人ごとに種痘の位置を書いた短冊型の「カルテ」もある。

これらの資料は免許状が明治三年のほかにほとんど江戸時代の記録。深山家は初代宗桂から六代同地で続いている医者が、資料は三代目玄石のころのものが多い。玄石は嘉永二年(一八四九)に日本で本格的に始まった種痘で、嘉永三年に大阪除痘館から痘医許

可証と分苗を受けたことが公式の記録に残っている人で、深江を根拠地に撰録で熱心な種痘活動が続けていた。

深山家からはこのほか、明治初期のドイツ製顕微鏡や古い医学書なども同史料室へ寄贈されており、館内の一部はさながら医学の歴史コーナーの模相。志井さんや、太田垣正雄・財産区管理会長も、次々と見つかる貴重な医学資料に興奮気味。「深山さんの旧家がそのまま取り壊されていたら貴重なものが散逸するところだった。分類などができたら特別展として講演会なども開きたい」と喜んでいる。

同史料室は阪神電車深江駅の南側で、二十一日にオープンし、毎週土、日曜日に一般公開(事前に連絡すれば平日も)する。

### 【協力団体】

- 現在、神戸市教育委員会
- 会・東灘区役所・神戸史学会・武陽史学会・芦屋市教育委員会・芦屋市文化財調査団・神戸商船大学・井上郷土玩具館・神戸華僑歴史博物館・大丸・サンT V・深江リビングセンター等

# 町の人たちで「民俗博物館」

神戸深江会館であす開館

民具など1200点提供

## まず「歴史展」

町の歴史の「証人」である民具、史料を出した。町の人の手による民俗博物館「神戸深江会館生活文化史料室」が、神戸市東灘区深江本町三丁目、神戸深江会館の別館として二十一日、オープンする。地元の深江財産区管理会(太田垣正雄会長)が会館を建て、県立御影高校の田辺真人教諭(三)らグループが町の資料の収集、整理をすすめた。

町の歴史の「証人」である民具、史料を出した。町の人の手による民俗博物館「神戸深江会館生活文化史料室」が、神戸市東灘区深江本町三丁目、神戸深江会館の別館として二十一日、オープンする。地元の深江財産区管理会(太田垣正雄会長)が会館を建て、県立御影高校の田辺真人教諭(三)らグループが町の資料の収集、整理をすすめた。

町の歴史の「証人」である民具、史料を出した。町の人の手による民俗博物館「神戸深江会館生活文化史料室」が、神戸市東灘区深江本町三丁目、神戸深江会館の別館として二十一日、オープンする。地元の深江財産区管理会(太田垣正雄会長)が会館を建て、県立御影高校の田辺真人教諭(三)らグループが町の資料の収集、整理をすすめた。

展示物を並べた生活文化史料室。神戸市東灘区深江本町三丁目



「編者から」  
深江の史誌の編さんの中で集まった一千点の民具を収蔵して、地域社会の歴史と生活文化の歩みを教えてくれる郷土生活のミニ歴史博物館／開館以来、市民の有志、役所関係者、報道関係者、郷土史研究者など本当にたくさんの方々のお世話になりました。今や展示品の四倍もの資料が収蔵されましたが、まだまだありましたら、ご寄贈ください。／当室では展示のほか見学会や講演会も催しますし、このような冊子を刊行します。原稿をお寄せください。



東灘区深江地区

「ミニ歴史博物館」

住民の力で建設

史料や民具集めて

江戸中期からの千二百点

「できたぞ、わしらの『ミニ歴史博物館』」地域の人たちの手で作られた町の民俗史料館「神戸深江会館生活文化史料室」が神戸市東灘区深江本町三に完成、二十一日にオープンする。

きょう、オープン祝う

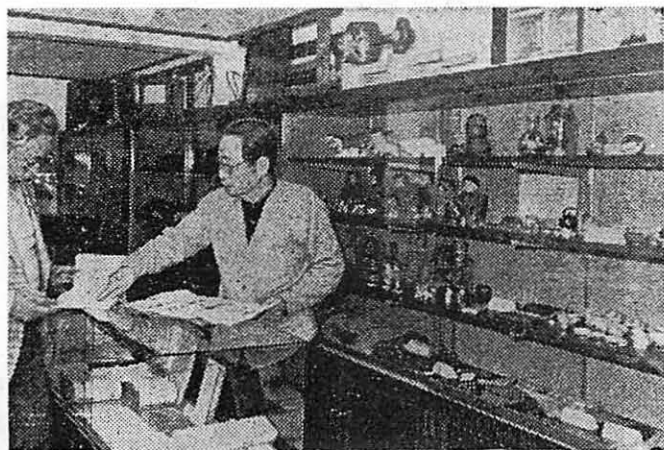
深江地区は旧武庫郡本庄村で、昭和十六、七年ごろに村の歴史を後世に残そうと、村誌発刊の計画があった。しかし、その後、戦災や水害などで計画が中止され、二十五年には神戸市に編入された。五十年ごろから住民の間で再び、旧村の歴史を残すため「深江史誌」を発刊しようとの声が出て、史料の収集や整理などを始め

た。神戸史学会会員で県立御影高校教諭、田辺真人さん(まこと)に作業を依頼。地元の深江財産区管理会(太田垣正雄会長)が、回覧板で住民に協力を呼びかけたところ、江戸時代末期から六代続いている町内の医師や一般家庭から江戸時代中期から昭和期までの民具、史料など約千二百点が寄せられた。同財産区管理会は、これらの生

活文化史の遺産を一室に集めて展示し、住民らに見てもらおうと、深江会館北側に鉄筋二階建て延べ八〇平方メートルの別館を建設。主な民具や史料を展示した。史料の中には江戸時代末期から明治時代にかけての種痘の免状やカルテなど貴重な医学関係の古文書や、大正十二年九月の関東大震災を伝えた大阪毎日新聞の号外な

ど。また地元の窯として有名なた打出焼の陶磁器類、近世の合戦に使われたかぶとや火縄銃、大正期の子供のままと道具、クワ、スキ、とうみなどの農具などを一、二階に展示している。田辺教諭は「町の人たちの手でこうした『ミニ博物館』が作られたのは神戸市内でも初めて。今後は年四回ぐらい特別展を開くほか、講演会などを催し、地区の歴史センターにしたい。地元の小、中学校からも見学の申し込みがきている。深江史誌の発刊は三、四年先をメドに進めたい」と話している。

同史料室は毎週土、日曜日に開館。午前十時から午後五時まで。入館は無料。



地域の人たちの手で完成した生活文化史料室

「ミニ歴史ツアー」(友の会)

開室一カ月で史料室を支える友の会(小嶋悦郎代表)の会員は約百名となり、半日の散策を計画しました。四月十二日午後一時、阪神大石駅に集合、沢の鶴酒造資料館を見学し、酒蔵地帯を訪ねます。今後身近な歴史発見の散策や他地方の文化に接するバス旅行など計画中。年会費千円です。ぜひご入会を。

コンクリート砂はくじ  
**地域文化の花開く**  
 神戸深江会館  
 生活文化史料室

神戸市東灘区深江本町三に地域  
 の民具や史料を集めた「三歴史博  
 物館」神戸深江会館生活文化史料  
 室」がこのほどオープンした。さ  
 ざるかな史料室だが、住民たちが  
 力を合わせ「地域の文化遺産を後  
 世に残そう」と、史料編集の過程  
 で作った。各地でふるさと運動や  
 コミュニティ活動が進められて



いるが、コンクリート砂漠の大部  
 会では、自分が住んでいる町の歴  
 史を知らない人が増え、ふるさと  
 意識も薄いのが実情だ。そんな中  
 で誕生した史料室の完成を取らな  
 くて、地域の人たちの土地に対する

愛情」に深い感動を覚えた。神  
 戸の街の片すみに咲いた地域文化  
 の一輪の花が、大きく、豊かにあ  
 くらみ、市内各地でも花開いてほ  
 しいと願っている。

(平野 丈夫記者)

まず史料室から紹介しよう。阪

神電鉄深江駅南の大日靈女(おお  
 ひるめ)神社境内に、深江財産区  
 管理会の「深江会館」がある。史  
 料室は、その北隣。鉄筋二階建  
 て延べ八〇平方メートルのちびけなク  
 リーム色の建物だ。内部には安政  
 年間(一八四一―一八六〇)に種  
 痘した状態を写入して記した「種  
 痘姓名録」(現在のカルテ)や明  
 治三年の運上所(税関)の積出許  
 可状、明治初期のドイツ製眼鏡  
 鏡、近世の合戦に使われたかぶと  
 や火羅銃、農具、地元の薬として  
 有名だった打出錠の陶器、大正時  
 代の地図や写真、新聞など千三百  
 点。医学関係の資料は江戸末期か  
 ら大分も残っている医師が提供  
 し、消防団は古い格納庫から昔の  
 消防用具を探し出し、神社の氏子  
 総代は、社殿から民具や史料を見  
 つけ、婦人会は「女の目」で昔の  
 生活用品を集めた。「ウチにこん  
 な古い物があつたが……」と史料  
 を持ち込んだ住民もいるという。

ところで史料室は旧村(深江

提供された。  
 村)の村誌(深江史誌)を編集す  
 る過程で生まれた。村誌発刊の計  
 画は昭和十六、七年ころからあつ  
 たが、阪神大水害、神戸大空襲、  
 ジェーン台風の高潮被害などで、  
 史料が散逸して実現しなかった。  
 戦後の二十五年には旧村が神戸市  
 に編入され、明治時代にはわずか  
 百戸足らずだった深江村も、現在  
 は約六千三百戸(約二万人)に戸  
 数や人口が増え、街の様子もすく  
 かり変わった。新しい住民が増え  
 て地域の歴史を知る人も数少なく  
 なった。このため、深江財産区管  
 理会を中心に古くからの住民らが  
 『文化遺産』の発掘に協力した。

また、各地で市町立など行政体

が設けた史料館や歴史博物館、郷  
 土歴史館などを数多く見てきた  
 私は住民から、こんなに多くの  
 史料や民具が自主的に寄せられた  
 ことに感服する。「自分たちが住  
 む街のために」といっても、大勢  
 の場合には、特に無関心の人が  
 多いと思う。新しく移り住んでき  
 た人の多い街では、とりわけそう  
 した傾向が強い。仕事の関係で各  
 地を転々としている私も、その土  
 地の地域文化には関心をもちなが  
 らも、実際には、そういう、無関  
 心派の一人にすぎない。その  
 が、『官製』だけにおさなりなも  
 のも少なくない。住民から民具な  
 どを半強制的にかり集めて郷土博

毎日新聞  
 1981年  
 (昭和56年)  
 3月22日  
 (日曜日)

# 土地に“深い愛着”

## みんな探した史料、民具

「旧村の歴史を後世に残し、伝え  
 たい」と五十年に「深江史誌」の  
 発刊を再び計画。地区内の旧家、  
 自治会連合会、婦人会、消防団、  
 老人会など三十四団体、全戸六千  
 三百世帯に回覧板や文書で協力を  
 呼びかけ、これらの史料や民具が  
 きた、といえる。

「深江史誌」の執筆を依頼されて  
 いる神戸史学会会員の田辺真人さ  
 ん(左)は「土地に対する愛情の一  
 言に尽きます」というが、住民の  
 未だ例も知っていない。

物を館を作り、展示したまきはよか  
 ったが、オープン式のおとほり半  
 をかけて閉じっぱなしというお粗  
 末な例も知っている。  
 そういう意味でも、住民が力を  
 合わせて史料室を作り、管理、運  
 きた住民にも「地域の歴史を知る  
 のに役立つ」と好評です。今後は

を現在に生かす街づくり」に役立  
 てようとの姿勢は評価できる。  
 深江財産区管理会会長の太田垣  
 正雄さん(右)は「ちびけな史料  
 室なんです、新しく移り住んで  
 よい街づくりに寄与することを期  
 待したい。」



住民がつくった三博物館の中  
 (右は「村誌」を執筆する田辺  
 真人さん、左は深江財産区管理  
 会会長の太田垣正雄さん)